

アスペン便り

一 丸 節 夫 (名誉教授)
STIchimaru@aol.com

2000年6月15日、私は家内とともに梅雨空の成田空港を飛びたち、その日の夕刻アスペン空港に降りたった。

アスペンはアメリカコロラド州の中央やや西よりに位置する人口約五千の小さな町である。ロッキー山脈奥深くロアリングフォーク峡谷に沿い、標高二千四百メートル、冬は北米有数のスキーリゾートとなる。それはまた、自由創造の思考を尊ぶ人々の集う文化の地でもある。

この便りは、アスペンの固有文化が成育してきた道程と、そのなかですばらしい発展をとげたイスラエルからの一家族の物語りである。

アスペン インスティテュート

戦後も間もない1949年の夏、シカゴの実業家 Walter P. Paepcke の呼びかけで、『ゲーテ生誕二百周年記念集会 (Goethe Bicentennial Convocation)』がこの地で開かれた。ゲーテがその人であった「万能人 (Universal Man)」の公案を軸とし、シカゴ大学教授 Robert M. Hutchins を座長に選りすぐりの学者・文化人が集まり、「ゲーテの世界文明大構想は現代社会に役だち得るか」と「ゲーテの人類愛大思想はわれわれを救い得るか」をテーマに、20日間の会合がもたれた。

Albert Schweitzer 博士はこの集会に出席し、「ゲーテの遺産」と題する基調講演を行った。博士がアメリカを訪れたのは事実上これが最初で最後となった。戦後の混乱期にあった西欧文化とその行方を真摯に探索する人々の考えが、この会合を通じて高められ集約されたと、伝えられている。

この集会はさらに二つの後継ぎをもうけた。

まず、この集会のもうひとつの中心行事であった一流音楽家たちによる演奏会が発点となり、アスペン音楽祭・音楽院 (Aspen Music Festival and School) が発足した。この音楽祭は昨夏第50年次の記念シーズンを迎え、6月下旬から8月下旬にわたる9週間、連日多彩なプログラムが展開された。今期第51年次からは、主会場がすばらしい音響効果をもつ“半永久”のベネディクト音楽テントに一新され、6月23日こけら落しのコンサートが開かれた。

もうひとつは、その翌年に設立されたアスペン人文科学研究所 (The Aspen Institute for Humanistic Studies) である。この組織は1970年代に入り本部をニューヨークに移し、シカゴやワシントンさらには日本やヨーロッパに《アスペン インスティテュート》の支部をひ

ろげた。

この夏8月19～22日、アスペン インスティテュートはその50周年記念集会をベネディクト音楽テントでひらいた。中心テーマを「世界化と人類の状態 (Globalization and Human Condition)」と設定し、社会正義や貧困と病苦をふくむ地球環境問題が話し合われた。22日の閉幕講演で、元アメリカ大統領 Jimmy Carter が、南アフリカにおけるエイズの蔓延とそれに対する方策の遅れを指摘し、「アメリカはけちな国だ (U. S. is a stingy nation.)」と喝破したのが、印象に残る。

アスペン物理学センター

アスペン物理学センター (The Aspen Center for Physics = ACP) は、G. Stranahan と M. Cohen の二人の物理学者がアスペン人文科学研究所にはたらきかけ、その一部として1962年に発足し、1968年に独立の研究機関となった。センターは自由な学術的創造活動そのものを価値とし、その追及を第一の目的としている。その使命は、「理論物理学者が、教育・企業組織の日常責務から解放され、専門分野をわたり自由に交流できる研究センター」と規定され、世界各地から集まった物理学の研究者達が、夏の3か月間ロッキー山脈奥深い谷あいの美しい環境で、それぞれの専門を横断し自由に考えを交わし発展させることができる。

ACP は、創設時からある小さなストラナハンホール、図書室などがあるベテホール、そしてバラック建てのヒルベルトホール跡に1996年新築されたスマートホールから成り、それらがアスペン (はこやなぎ) 林のなかに建ち並んでいる。スマートホールには、少人数会合用のバーディー小部屋とゲルマン小部屋が設けられ、百人余を容れる講堂がそれに隣接する。ノーベル賞物理学者 John Bardeen, Hans Bethe, Murray Gell-Mann らが多額の私財を寄付し、私たちもそれぞれ“貧者の一灯”を供し、ACP の維持発展に関わった。加えて、米国科学基金財団 (NSF) や米国航空宇宙局 (NASA) などの公的機関もその意義を高く評価し、ACP を積極的に支援してきた。

ACP と私との関わりは1969年夏の3か月に始まる。以来私は家族共々多くの夏をこの地ですごし、科学者、音楽家、そして地元の人々と交わり、文化と創造の喜びをあじわった。1995年の東大退官を前に、ACP を中心

とするこのアスペンとの繋がりは将来も大切にしたいと考えた。そして1992年、ベランダの下にロアリングフォーク河が流れる山小屋風のコンドミニウムを手に入れ、1993年以来毎夏をここで過ごすようになった。

これ迄30年をこえる ACP との付き合いの間に、私は多くの得難い経験をした。パルサーの本体について Bethe らと論じた1969年の夏、また日本でのスーパー神岡会議を終え ACP に直行した人たちが1998年6月のワークショップで行った熱気ある報告など、今もって心に残っている。しかしここでは、ACP とアスペン音楽祭・音楽院とが共同で行ったあるイベントについてお話ししよう。

1995年7月8日、音楽祭との共同企画で、ACP の Stephen Hawking 博士が自ら選曲を担当した‘特別コンサート’がひらかれた。博士は量子相対論的宇宙論の大家であるが、重度の身体障害の身をおしてしばしばアスペンを訪れ、ACP 活動のほかにアスペンインスティテュートでの一般講演もしておられた。彼はまた音楽にも造詣が深く、その翌年に竣工が予定されている ACP 本屋（スマートホール）建築費醸金のためにと、このイベントの実現にひとだ脱いだ。

会場は大入り満員、Hawking 博士は各演奏曲ごとにステージに上り解説した。選ばれたのは、ワグナーの田園詩ジークフリート、モーツアルトのフルートとハーブのための協奏曲、ブラームスのバイオリン協奏曲であった。解説の中に次のくだりがあった：“モーツアルトの作品の中で300以下のケッヘル番号のものはお勧めできない。しかし多くの法則がそうであるように、この法則にも例外がある。そして‘フルートとハーブのための協奏曲’はその例外の一つである（ちなみにこの曲は K299）。”

車椅子上でパソコンの電子音声进行操作し語りかける博士の姿は、正直のところ、音楽会固有のうきうきとした雰囲気とはややかけ離れたものであった。しかし、満場の聴衆は博士の“声”にしずかに耳をかたむけそして大きな拍手でこれに応えた。それは、音楽と ACP 本屋新築へむけられた Hawking 博士の情熱をアスペンの人々がしっかりと受け止めた証しであったものと、私は思っている。

今期の ACP サマープログラムは5月29日から9月10日までの予定である。参加科学者は常時80余名を数え、人により期間は異なるがおおむね2～5週間滞在する。ACP 活動は参加者相互の交流研鑽が中心であり、関連して週2～3回のセミナーと毎週火曜の夕刻に集うセンターピクニックがある。それらに加えて、約10件のワークショップがサマープログラムの間3～5週間単位で企画される。

私が着いた6月15日には「宇宙のダイナモ」ワークショップがたけなわであった。

銀河系や恒星系さらには太陽や地球の周辺では非常に強力な磁場が作り出され、その磁力線が天体やその大気（プラズマ）の動きと絡みあい、特異な振舞いとして

観測されることがしばしばある。太陽表面の黒点活動に伴う磁気嵐はその一例である。このワークショップは、各種の宇宙磁場現象の特徴を地上のプラズマ実験と対比して理解を深めようという壮大な視野のもとで企画された。在プリンストンのプラズマ物理学者山田雅章博士もこれに参加し、磁力線繋ぎ替えの物理機構を明かにする実験研究と今後の見通しを話していた。

シャハム一家

6月21日、私と家内はコンドミニウムの管理を担当している事務所を訪れ、二三の打ち合わせをしていた。そのとき一人の若者が事務所に入ってきた。私たちと顔を見合わせ、どちらからともなく「やあ、お久しぶりですね。お元気ですか」と、声をかけあった。

それは Gil Shaham である。Gil は30歳に満たない若さですでに‘Maestro’を冠せられる天才バイオリニストである。この数年毎夏アスペンで、またある年にはミュンヘン近郊グッハウでも、Gil の演奏を聴くことができた。今期の音楽祭では、6月25日の‘モーツアルト・マラソン’で、交響協奏曲嬰ホ長調を、Jaime Laredo（ビオラと指揮）と共演した。

Gil の父は高名な理論天体物理学者 Jacob Shaham で、私とシャハム一家とのつき合いは Jacob を通じて始った。

1971年、私は東大からシカゴの南二百キロメートルのところにあるイリノイ大学に出張していた。この時イスラエルのヘブライ大学からイリノイ大学 David Pines 教授の許にポスドク（博士特別研究生）としてきたのが Jacob であり、Gil はその年イリノイ大学のある町アーバナで生まれた。Jacob は当時頻発した中東戦争についてイスラエルの立場を擁護する論陣を地元の新聞に張る熱烈な愛国者であった。そして2年のポスドク期間を終えた1973年、彼は数多のアメリカの大学の勧誘を退け、Gil を連れてイスラエルに帰った。

Jacob は、成長期に科学者の道を進むかバイオリニストになるかの判断を迫られたほど、音楽の才能にも恵まれていた。Gil はその才能を正確に受け継ぎ、イスラエルで7歳の時からバイオリニストの道を歩み始めた。1981年 Jacob はアメリカに渡りニューヨークにあるコロンビア大学に奉職した。これは Gil と4歳下の妹でピアニストを目指す Orli の音楽教育のためでもあった。

アメリカでの Jacob は ACP サマープログラムの常連となった。Jacob を含む ACP 天体物理学者の関心事は‘X線星やガンマ線天体の発現機構’を明らかにすることであった。

星の進化の最終状態のひとつに‘中性子星’がある。この天体の平均密度は1立方センチメートルあたり一億トンを超えるものと推計される。そして、このとほうもなく高密度の中性子星が、高エネルギーの電磁波であるX線やガンマ線を放出する特異な天体の発現に直接の関わりがあると考えられている。Jacob らはこの関連を理論的に解明する課題に深く切り込み、いくつかの重要な学術上の貢献をした。

Gil はアスペン音楽院に通い、バイオリニスト育成の卓越した指導者である Dorothy DeLay の門下生となり、急速に成長した。そしてほどなく Gil の演奏はアスペン音楽祭のハイライトのひとつとなった。

1998年の夏、Gil はアスペン・チェンバー・シンフォニーをバックに、ベートーベンのバイオリン協奏曲をひいた。それは至高の演奏であり、満堂の聴衆を魅了した。コンサート終了後、私たちはステージ裏に Gil をたずね、賞賛の言葉をかけた。すると、Gil は静かに「これは偉大な音楽です (It's a great music.)」と答えた。私はこの言葉をきき「真理への畏敬」に通ずる求道者の謙虚さを感じた。そして、Gil は年若くして巨匠の域に達したと思った。

しかし残念なことに、その3年前の1995年4月20日、Jacob はコロンビア大学教授として円熟の期に52歳の若さでこの世を去った。その葬儀での Gil の演奏は列席者の心うつものであったと伝えられている。

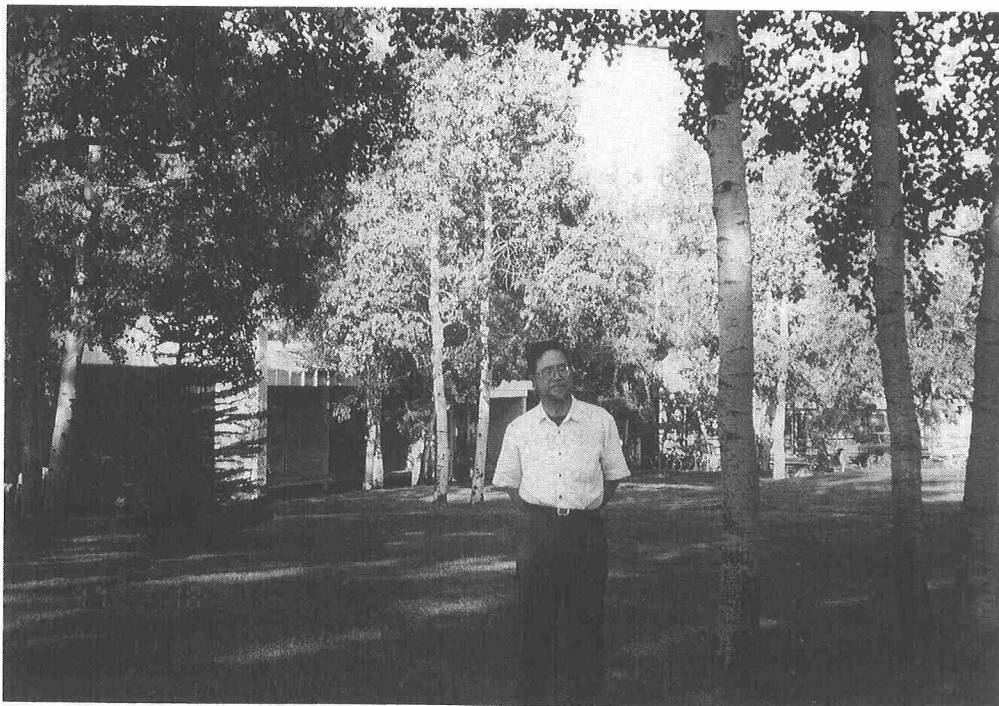
そして1996年8月13日、ACP とアスペン音楽祭・音楽院は合同で Jacob の追悼会を催した。そこでは、Jacob のよき指導者かつ同僚であった David Pines と Malvin A. Ruderman (コロンビア大学教授) が弔いの言葉を述べ、遺児の Gil と Orli がお別れの演奏をした。

エピローグ

7月2日、アメリカ独立記念日を2日後に控えた日曜日、Orli Shaham は David Robertson が指揮するアスペン・フェスティバル・オーケストラとともに、グリークのピアノ協奏曲イ短調を力強く演奏し、満場の感動をあつめた。それは、3～4年前アスペンで始めての Gil との共演でみせたややひ弱な感じとは全く異なり、ソリストとして立派に成長し自信に満ちた Orli の姿であった。

その数日後の7月6日、Orli は技巧のバイオリニスト Robert McDuffie と組んだ特別演奏会で、バッハ・リストのオルガンプレリュードとフーガ・イ短調をピアノ独奏した。私はこのときも同じ感を深くするとともに、Jacob があと数年生きながらえ、この Orli の姿を見ることができたらと、思わずにはいられなかった。

多くの人々の熱意と永い年月をかけてこの地で育まれた自由創造の気風は、これ迄述べたように、自然科学や人文科学さらには音楽に代表される芸術活動の間の垣根をも取り払った。シャハム一家の多彩な活動はこのアスペン文化の産物といっても過言ではない。しかも、これが珍しい例ではなく、むしろここではよく見聞きする話のようである。機会があればこれらについてもお便りしたいと思う。



(写真：アスペン物理学センターと筆者、1997年7月撮影)

東大の定年延長を考える

海野 和三郎 (名誉教授)

unno@parkcity.ne.jp

「東京大学の定年延長を危惧する」シンポジウム (世話人: 益田隆司他) が9月3日学士会館で開かれた。以下は、それに出席した私的な乾燥乃至見解の記録である。

シンポジウムの趣旨は、表題の通りであるが、出席者の殆どはその趣旨に賛成な任意参加者で、東大関係者とOBが目についた。趣旨説明の後、東大 (60歳) 定年制がどう始まったか (寺崎昌男) の紹介があり、60と65の違いがあるが、当時も同様な議論があり、noblesse oblige ともいえる正論が通って、結局は退職金の支給が妥協点となって決着したらしいことが推察された。

定年延長は、政府が定めた年金支給年齢が65歳になることがきっかけとなって起った問題であるが、大学としての最大の危惧は、平均年齢上昇による学問的活動力の低下である。具体的に議論となるのは、1) 大学としての意志決定の仕方、2) メリットとデメリットの評価、3) 制度改革、4) 機構改革、などである。また、それぞれに21世紀の危機に向かう東大の役割、日本の役割、時代的变化、国際的見地、人類的見地、などの視点があり、また精神論と実質論とが交錯する。

1) については、関心のある方は次の益田さんのメールをみて下さるとよい:

<http://www.masuda.cs.uec.ac.jp/~masuda/teinen-symposium.html>

2) については、「大学は養老院ではない」という言葉のように、活動力の低下がデメリットの主なものであることは、大正11年当時と変わらない。しかし、時代背景が当時よりは相当に変化しているのでそれを考慮する必要がある。第1は、富士山型乃至ピラミッド型の年齢分布が、少子化高齢化に伴って横幅が半分くらいに狭くなっていることと、平均寿命が10歳くらい上がって分布が縦に高くなったことである。大学人が一般職より平均的に少し加齢した時に適性があり、その役割が社会的に或いは国際的に要求されていること、よい人材を集めるために経済的に安定した職種であることも必要であることなどは、大正11年も今も本質的に違いはない。

従って、活動力の低下が絶対年齢による部分と相対年齢による部分とどちらにを重要視するかで、定年延長はメリットともなりデメリットともなり得る。蓮実総長の定年延長の提案の説明では、活動力が相対年齢によってきまるとする方に重みをつけたものと考えられる。まだ元気で有能な人を見境なく早々と退職させるのは損失であるということであろう。年齢分布の変化もさることながら、価値観多様化の時代変化からみた定年延長のメリットとデメリットを判断する必要がある。曰く生命科学の時代、数学情報科学の時代、エネルギー枯渇の時代、地

球環境の時代、エコエティカ、等々に対応しなければならない時に、定年延長などで新進気鋭の人材の登用を妨げて新時代の要請に対応できるのかという問題である。

その対応は、定年延長が主な関連項目という訳ではないが、悪い影響となることは否めず、定年延長を提案するなら機構改革と連動させての提案が必要である。広報室 (広報委員長: 大塚柳太郎) からの説明文にもそうした意味も読み取れなくはない。

3) の制度改革の提案は、多岐にわたるが、また出尽くしてもいない。小林正彦副学長は、定年延長を問題とするより、任期制導入による制度改革で総括的に問題解決を計れということのようであった。ある部局ではすでに進行しておりその導入は制度的に問題ないという。大学の独立行政法人化への移行とも整合性があるようである。私は、学問創生に良い環境が重要であると思うので、独立法人化のデメリットは極めて大きいと感じており、任期制導入も賛成できないが、考慮すべき問題であり、大局観の優れた人が事にあたれば良い結果を出すことも可能かもしれない。ただし、一律の制度化は止めるべきであって、また、学内に反発と阿り、疑心暗鬼、南部対立などで精神的荒廃を招くことを予め防ぐ配慮が必要であろう。

一方、黒川清氏は、痛快ともいえる国立大学批判 (ただし、論文引用回数は所属コミュニティーの人数の二乗くらいに比例すると思うが、そのことがデータの解釈に入っていない) の後、その原因として縦社会の精神構造と客観的評価と競争原理の導入の不十分さを強調した。傾聴すべき意見であるが、小林副学長との論争にも拘わらず、両者の主張は大雑把に同一線上にあるように感じられた。いずれにしても、制度改革は定年延長問題の提起をきっかけにして、今後とも学内外の英知を結集して当たるべきであろう。

4) の機構改革は、この際東大の大学院大学として不可欠な発展を遂げるのに必要な改革と結合して、教官数に対する学生数の過大さの軽減と学位取得者の就職難緩和とリベラルアーツ教育の抜本的改善を教養大学の設立によって解決し、東大の長所を伸ばし短所を補うという考えである。教養大学構想については、「日本の高等教育を考える会」 (代表: 飯島宗一・西沢潤一) のホームページ: <http://nifty.ne.jp/EDUCATION> を見て頂きたいが、その理念は、2千年紀の地球規模の人類生存の危機に対処する科学技術の基礎的思想とそれを先導するリベラルアーツ教育を行う大学を設立する構想である。大学院定員の倍増が慢性的な教官数の不足を生み、助手定員の振り替えなどで講座制を見かけの上で保ってい

る現状では、大学院の活性化のために思い切った学部学生定員の削減が必要である。その削減された学生定員を教養大学に回せば、大学院大学と教養大学が学生定員の上で、お互いに有無相通ずることになる。60歳に達した大学院教官は、希望により教養大学教官となることが出来る。近頃定年に達した方々を見ると世界的な研究者として活力を保っている人が多く、よい環境と個人研究費を支給して学問発展に貢献させるのが何よりも必要なことである。また、学位を取りたての新進気鋭の若手を助手助教授に採用すれば、よい環境が彼等の能力を発展させるのに役立つであろう。何よりも経験豊富な斯界の権威と新進の若手のコンビが20歳前後の若者の教育に対しベストの陣容であると考えられる。

具体案は、東大の現役の方々が計画し、「日本の高等教育を考える会」を支援団体として世論や文部省などに働きかければ、すでに「高等教育を考える会」が基礎固めをしてきてあるので、実現の可能性は十分あるものと思われる。現役の諸氏の自覚と奮起を切に願って止まない。

